

～ 日本看護系学会協議会連携事業 ～  
公益社団法人日本看護科学学会 平成23年度 災害看護支援事業

## 事業完了報告書

ケアを媒介にした新しいコミュニティ  
を形成する活動の一環としての  
なでしこ茶論（サロン）の運営

事業運営団体名称： 東日本これからのケアプロジェクト事務局

所属機関： 健和会臨床看護学研究所

代表者名： 川嶋みどり

## ■ 事業内容

事業の内容、手法、場所、対象者とその人数などを具体的に記載すること。

本事業は、仮設住宅で暮らすことになった住民が、自らの心身の健康を取り戻しつつ、「隣人を気遣い合う暖かい地域」づくりに参加することを目的とし、種々のケアを提供しながらコミュニティを形成していけるよう支援する事を目的として取り組んだものである。

東北地方の風習である「お茶っこ」を通し、茶論に参加している住民とのコミュニケーションを図るとともに、住民同士の語らいができるように「場を作る」ことを目指した。

### 1. なでしこ茶論の開催

#### 1) 多賀城市山王住宅

多賀城市で最初にできた 45 戸の仮設住宅で高齢者、障害者、母子家庭等を優先し入居を勧めた住宅である。そのため、今までの居住地が異なる知らない住民同士の集団となり、コミュニティはできていない地域であった。仮設住宅住民の 65%以上が高齢者で、高齢化率は 38.5%と市全体 (18.4%) の 2 倍以上である。中でも当該住宅は 65 歳以上の世帯が半数を占めており、単身者用は 8 部屋あった。

必然的に参加者は高齢者が多く 60 歳代から 90 歳代であった。時に 20-30 歳代、そして幼児・小学生などの参加の他、偶然仮設住宅の住民を訪れた知人が加わることもあった。期間中 10 回開催し、毎回 10 名前後の参加であり、延べ人数は 101 名であった。殆ど毎回「初めての参加者」があり、5 回以上の継続者は 5 名であった。

「お茶っこ」の集いは日常的な自然のコミュニケーションの場に定着するよう心がける一方、変化をつける意味で、お茶のメニューは日本茶・複数の紅茶・ハーブティ・お抹茶・コーヒーなどを揃え、その日の気分に応じて選択できるようにし、器も複数の陶器を準備した。また季節感を味わってもらえるように、その時々の花を飾り、曆にまつわる品物 (お菓子・カードなど) を用意し、集い自体が心を慰める機会になることを意図した。

そうした雰囲気の中で、健康に関するテーマでの取り組みも加えていった。(表 1)

メンバーの中に、日本リラクゼーションフットケア協会所属の看護師がいた関係で、協会メンバーの協力も得られ、フットマッサージやハンドマッサージも毎回お茶っこの合間に実施した。これを楽しみに参加されるかたも少なくなかった。

#### 2) 石巻市大森団地仮設住宅 (河北地区)

石巻市では石巻市立病院 (以下市立病院) の看護師達が仮設住宅での健康相談事業を実施し、「お茶っこ」を開催していた。ただ、震災前までは病棟勤務をしていた看護師にとり、地域住民への健康相談や「お茶っこ」の運営をどう進めていいのかわからない不安があることを相談され、2月19日に「なでしこ茶論」をともに開催することにした。

当日の参加者は女性 17 名、男性 2 名であり、過半数が後期高齢者であった。持参した「むぎこがし (東北地方の駄菓子)」をテーブルにだしたところ、「なつかしいね～」との声が複数あがった。「昔はこれしかおやつがなかった」「(粉) を吹き出さないよう食べるのが難しかった」「練って食べた」などと、昔話で盛り上がる一面もあった。気持ちが 1 つになった時期を見て、「誤嚥予防体操」、「爪もみ健康法」を紹介した。何れも、感染予防を意図したセルフケアの方法である。参加者は指の変化 (指尖が膨らむ) を実感されていた。

折しも持参した紙製の「羽をひろげた鶴」を見た参加者たちの要望により、急遽折り紙教室になったが、爪もみで指の動きが良くなったことを実感する機会にもなり、予想外の効果が検証できた。翌日、参加していなかったその地域担当の看護師から、参加者から好評だったとの報告があった。

### 2. 事業評価会議と準備活動

#### 1) 幹事会での評価会議

山王仮設住宅での「なでしこ茶論」の様子を報告し、運営方法についての評価を、毎月東

京での幹事会で行った。(10月31日、11月25日、12月16日、1月16日、2月21日計5回、3月は30日予定)

2) 多賀城市の仮設住宅を管理している保健福祉部健康課との情報交換

仮設住宅の担当保健師からの情報では、「コミュニティを形成する意味から本活動は歓迎」の声があった。一方、「既に住民達が取り組み始めているので、今のところ需要はない。」(多賀城市社会福祉協議会)との意見もあり、今後この地域での活動の拡大はできないと推測される。

3) 石巻市との情報交換・現地状況の把握

石巻市健康推進課との面談、打合せ会議を行った(10月23日-25日、1月12日-13日)。また石巻市の仮設住宅におけるなでしこ茶論の運営に際して、仮設担当者の市立病院看護師との会議(2月6日)、評価会議(2月20日)を行った。

表 1. 山王なでしこ茶論の参加数と実施内容

回	開催日	参加者 (住民+訪問者)	実施内容(特徴的なこと)
1	10/12	9+1(初参加3名)	・メンバーの家に咲いていた花を会場に飾った ・「秋の落雁」を持参 ・手作りの小物(見本)を持参し、作りたいものの希望を募った
2	10/28	8(初参加1名)	・この回から抹茶を出した ・抹茶に合う干菓子を持参 ・風邪予防で手洗い、含嗽の説明
3	11/9	7+1(初参加1名)	・継続
4	11/21	11(初参加3名)	・継続
5	12/14	8	・スカーフ制作 ・手作りのクリスマスカード、クリスマスバージョンのチョコを持参
6	1/20	7(初参加1名)	・「寒さを乗り切ろう」をテーマに爪のケア(血行を良くする)を説明・実施
7	2/7	7+2(初参加2名)	・「寒さを乗り切ろう」と生姜湯を提供、「生姜湯の効果」を説明 ・「身体を動かそう」とストレッチ実施 ・バレンタインチョコを持参
8	2/24	10+1(初参加4名)	・雛まつりをイメージした会場設営(桃の花、折り紙のお雛さま、雛あられ) ・「睡眠のメカニズム・快眠への対処について」説明
9	3/6	9+1(初参加2名)	・「寒さを乗り切ろう」指先を温める-睡蓮(折り紙)の作成
10	3/23	12+7(初参加7名)	・「元気の基本は食べること-美味しく食べようよく噛んで-」ボルシチの調理・一緒に食べよう ・「顔のマッサージ」
	延べ人数	101名	

## ■ 事業成果

できるだけ具体的に記載すること。

### 本事業の成果

#### 1) 多賀城市山王住宅

主として、「なでしこ茶論」の参加者の変化等を通じてその成果を述べる。

##### (1) 専門職への信頼とケアを媒介にしたコミュニケーション効果

恐らく、当初は様子を見る程度に参加されたのであったろうが、次第に茶論の開催を、「楽しみにしている」「月に2回はして欲しい」「こうやって話す機会があって嬉しい」と期待されるようになった。具体的には、開始時刻前から会場に來たり、家族を連れて來るなどの様子が見られた。私たちメンバーに対しても、「会うのが楽しみ」といい、固有名詞で呼ぶようになり、関心や親しみが深まることを感じた。ハンドマッサージやフットマッサージは身体が楽になるからとの理由で参加される方が少なくなかったことは、本茶論が、当初から専門職によるケアを媒介にした交流の場とした事業の目的とも合致していた。また、ケアとは直接関係のないような環境創りが、参加者同士、メンバーと参加者との対話や関わりを深め、親しさとともに信頼関係が生まれて、ケアの効果をいっそう高めたとも言える。

住民たちが地域の保健師に対して「資格をもった人にきてほしい」「(保健師に)もっと巡回してほしい」と住民が要望している場面に遭遇したが、本事業を進めたメンバーらが、何れも経験豊富な看護師であったことも、短期間に上記のような成果を上げることに通じたといえる。当初から健康に関するテーマへの参加は熱心であったが、回を重ねるつど、自らの病気体験や、健康状態についての具体的な相談が自然に増えたことは、メンバーが「看護師」であったからこそである。

##### (2) 受け身から能動的参加、そしてコミュニティ形成への芽生え

「自治会」の存在も、コミュニティ作りに大きく関与していると考えられる。会場の鍵管理を委託業者ではなく住民自身で行うことになった辺りから、参加者の姿勢にも変化がみられて來たように感じる。この茶論が「私たちのためのもの」としてポスターの掲示や、ごみの処分を積極的に請け負うなど、茶論の運営にも積極的に関与されるようになり、設営から終了までの諸事を、主体的に実施するなどの変化が見られた。毎回参加する住民が來ないことを心配したり、不参加者はその理由をあらかじめ住宅の入り口に貼り出したり、相互に気遣う関係が生まれるなど、周囲とつながる意識的な行動が観察された。住民同士の会話も、次第に積極的になり、中途参加者が自然にその場に溶け込めるような配慮も見られた。話題の内容も時節の挨拶から次第に個々に抱えている問題、たとえば、世代間を超えて共通な「姑の立場、嫁の立場」などの経験なども語られるようになって來た。

##### (3) 不慮の事態さえも相互を気遣う関係を強化

この事業展開の途上で、本仮設住宅の居住者の孤独死が発見された(2/11)。この不幸な事件をかれらがどのように受け止めるかは、私たちメンバーにとっても大きな関心であったが、なでしこ茶論への参加者らは、その事を通じてよりお互いを気遣う姿勢にもつながったようで安堵した次第である。

未だ、復興の具体策が目に見えて來ない状況のもと、仮設で生活する多くの住民の現状から見て、本事業は点にもならない小さな試みであった。だが、たとえ少数の住民であっても、近隣の人々とのつながりを通して、困難を分かち合い、危機を乗り越える関係をつくる端緒となったことは確かである。その際、一般的なボランティアではなく、専門的なケアを提供しながら信頼関係を持った専門職の関与は、他の被災地においても、普遍化できると思われる。

兎に角、ケアを必要としている人々に対して適時適切なケアを提供するためには、それを必要としている人々自身が、家族以外のケアを受け入れる素地が必要で、そのためのコミュニティの存在は欠かせないと思う。

## 2) 石巻市大森団地仮設住宅（河北地区）

石巻市での開催は1回だけであったが、参加していなかったその地域担当の看護師から、参加者から好評だったとの報告があった。ここでの目的は、健康相談やその後の「お茶っこ」の運営方法に悩む市立病院の看護師の不安を払拭し、かれらの自立を図ることであった。メンバーの実施を見学しながら、「誤嚥予防体操」「爪もみ健康法」など自分達でもできそうだという感触を得たようだった。また、自分達が行っていることが間違いではないことがわかったとの反応だった。しかし、「数ヶ月に1回くらい励ましてもらえると嬉しい」という言葉があり、被災した看護師がこのような活動を継続していくのは、心理的にも非常に困難なことであることが伺える。加えて、仮設担当者の人員が減るとのことであり、身体的にも負担が大きくなることは間違いない。今後も支援が必要であると考えている。回数は少なかったが、石巻でのなでしこ茶論は、地域完結型、すなわち現地の看護職による「ケアしケアされる関係の息づくコミュニティづくり」への方向性を示唆するものと評価している。